

〈無量壽經〉の序分について(Ⅱ)

小 林 良 信

大乘經典の成立は、漢訳の年代等から西紀一世紀前後に始まると推定されているが、その敎説は多岐にわたり、思想の貸借も明確に示されないことから、大乘經典間の先後影響關係を解明する作業は困難を極めるものであると言っても過言ではない。浄土經典の成立及びその他の大乘諸經典との關係を明らかにすることにも同様の困難を伴うが、近年諸先學の研究の成果が發表され次第にその成立發展の様子が明らかにされつつあると考えられよう。しかし、未だ解決されない問題も少なからず残されている。本稿ではこれら諸先學の研究の成果を踏まえつつ、新たな視点として〈無量壽經〉の序文に焦点をあわせて若干の論考を加えてみたい。

序分は、証信序と呼ばれ大乘諸經典に一つの形式として共通に見られるものであるが、その形式性によって經典の説く敎説とは内容の上から必然的な關係を持っていないと考えられるためか、成立的な見地からは殆んど論及されていない。しかし序分も經典を構成している一部であり、〈無量壽經〉

の各異本の序分についてもそれぞれの展開にしたがって少なからず変化していると考えられることから、經典の内容とも有機的に関連していると理解すべきで、經典成立の背景を知る上で重要な手掛りを含んでいると考えられよう。

初期無量壽經の中でも最も古いと考えられる『大阿弥陀經』の序分については過日拙考を發表しており、ここでは再説をさけてその特徴のみをあげると、

一、『大阿』を初めてとする〈無量壽經〉の各序分には比丘名の列記があるが、この記述は他の初期大乘經典には全く見られず、〈無量壽經〉系の經典に特有なものであること。

一、これらの記述の原型としては、パーリ經典の中で長部・相應部・増支部等には全く見られず、僅に中部經典に類似した説示が見られること。漢訳阿含經典中には中阿含『待者經』・増一阿含『弟子品第四』・雜阿含『九九三經』等に比丘名の列記が見られるものの、阿含の説示としても特殊なものであると見られること。の二点を指摘することが出来る。

同じ初期無量寿経でも『平等覚経』になると、比丘名の列記は『大阿』に準じるが、加えて比丘尼名十、清信七名十六、清信女名を列記して『大阿』とは大巾に変わっている。

この比丘尼名等の列記は『平覚』にのみ見られるもので、後期無量寿経に全く継承されていない。又他の主な初期大乘經典の序分にも比丘尼、優婆塞、優婆夷の登場するものはあるが、名前を列記したものは見あたらない。『般舟三昧経』（三卷本）の序分には摩訶波和提比丘尼(Mahaprajapati Gautami)が三萬比丘尼と俱に仏所に至ったという説示があり、清信士、清信女に関しても羅闍祇王阿闍世が十万人をひきつれて仏所に至ったされ、またその具体的な比丘尼名や在家信者名を挙げないが、『摩訶般若波羅蜜経』序品第一にも

復有五百比丘尼優婆塞優婆夷等

とあることから、比丘尼や在家信者が釈尊の説法の座に列なっていたという認識が『平覚』独自のものであるとは言えないが、具体的な名前の列記という手法は比丘名の列記につながるもので『無量寿経』系の經典の特徴を示していると思われることができる。

またこれら三卷本『般舟三昧経』大品系若経等の比丘尼や在家信者が釈尊の説法の場にいたことを説く經典の序分には、一卷本の『般舟』を除いて菩薩名の列記が見られるのも特色の一つであるが、これらの菩薩は賢護を上首とする在家

の菩薩と考えられ、『無量寿経』『無量寿如来会』の後期無量寿経の序分に顕れる賢護等十六正士という記述に関わるものと見られるが、『平覚』はこれらについて全く言及していない。『平覚』が比丘尼や在家信者に関心を示している一方でこれらの在家菩薩の存在に関しての記述が無いことは注目しように。

次に後期無量寿経であるが、これらの經典は序分の形態から見て、二種類に分類ができると思われる。一つは、『無量寿経』と『無量寿如来会』で他方は梵本・藏本・『大乘無量寿莊嚴経』の三本である。

『寿経』『如来会』とも比丘名の列記は初期無量寿経に準じるが、『平覚』に見られた比丘尼、在家信者名に関する記述は全く継承されていない。それにかわって、菩薩名の列記と菩薩の勝徳を讃歎する記述のあるのがこれら二経の特徴である。その菩薩名の列記を『寿経』によって示すと、

又与_二大乘衆菩薩_一俱。普賢菩薩・妙徳菩薩・慈氏菩薩等。此賢劫中一切菩薩。又賢護等十六正士。善思議菩薩・信慧菩薩・空無菩薩・神通華菩薩・光英菩薩・慧上菩薩・智幢菩薩・寂根菩薩・願慧菩薩・香象菩薩・寶英菩薩・中住菩薩・制行菩薩・解脫菩薩皆尊_二普賢大士之徳_一。

となるが、この中で賢護等十六正士以下の十四の菩薩名について見ると、『摩訶般若波羅蜜経』序品に

〈無量寿經〉の序分について（Ⅱ）（小林）

其名曰毘陀婆羅菩薩。毘陀婆羅菩薩。導師菩薩。那羅達菩薩。星得菩薩。水天菩薩。主天菩薩。大意菩薩。益意菩薩。增意菩薩。不虛見菩薩。善進菩薩。勢勝菩薩。常勸菩薩。不捨精進菩薩。日藏菩薩。不欠意菩薩。

と説かれるのがそれであるが、これは他の大品系の般若経や三卷本『般若』に見られ菩薩名の列記も同説であり、殊に三卷本『般若』は八菩薩をあげるのみであるが、それぞれの出自を明らかにしている。これら十六菩薩は『大智度論』第七にあるように在家の菩薩で、『般若』の八菩薩説に更に八菩薩を加上して成立したものの考えられる。ところで、『寿経』『如来会』の菩薩名であるが、これらの十六正士説とは対応を示していない。笠法護訳『文殊師利仏土厳浄経』に他方仏国土の菩薩として説かれる東方無憂如来仏土の光英菩薩、南方慧王如来仏土の慧上菩薩、西方智積如来仏土の寂根菩薩、北方鈎鎖如来仏土の意願菩薩の四菩薩が『寿経』の光英菩薩、慧上菩薩、寂根菩薩、意願菩薩に対応するとすれば善思議以下の十四菩薩は他方仏国土の菩薩とされるべきで、居家の菩薩である十六正士とは区別されるべきである。つまり『寿経』『如来会』の序分に登場する菩薩には普賢等の出家菩薩と賢護等十六正士の在家菩薩、更に善思議以下の他方仏国土の菩薩の三類があると理解されるのである。次に梵本・藏本では菩薩名は弥勒を上首として上げるのみ

で勝徳の讃歎もなく、『厳経』に至っては菩薩の語すら序分には見られない。

これらの經典の中で菩薩名に関する説示が簡略化されていることは、次々と考え出された菩薩名が弥勒を頂点として次第に整理統合されたということを示唆していると思われる。以上〈無量寿経〉と初期大乘經典の序分について見てきたが、その記述が大乘菩薩思想の展開と密接に関わっており、大乘の菩薩が弥勒・文殊等の出家菩薩から賢護等の在家菩薩、更には他方仏国土の菩薩という順に発展していったことが見て取れるであろう。

1 〈無量寿経〉の序分について、『仏教論叢』第32号、昭和63年9月

2 『正蔵』十二、279b~c

3 『正蔵』十三、902c~903a

4 『正蔵』八、217a、『放光般若経』『正蔵』八、1a、『光讃経』『正蔵』八、147aにも同旨の説示あり、

5 『正蔵』十二、265c

6 『正蔵』八、217a~b、前註5参照

7 『正蔵』十一、900a

8 Sakḥavati vyāha, Atsuji ashikaga. p. 1~2

9 『正蔵』十二、318a

△キーワード 序分、十六正士、菩薩思想

（大正大学総合仏教研究所研究員）